

Wh 要素の生起位置と解釈 —英語および日本語と対照したロシア語の特徴—

エブセーバ・エレナ

1. はじめに

音韻論、統語論、意味論・語用論といった諸分野にまたがり、近年あらためて研究が盛んになっているテーマの一つに、“フォーカス”の分析がある。本稿では特に、(多重) wh 要素の文中での生起位置と解釈とのかかわりを中心に考察し、英語・日本語・ロシア語を扱った先行研究の成果と対照しながら、その考察過程で見出された主なポイントについて報告をおこなう。

論文の構成としては、まず 2 節で、フォーカス構造と統語構造にかかわる類型分類の例として、van Valin(1999)の交差分類を紹介するとともに、その分類がおおまかなものであることを述べる。その上で 3 節では英語、日本語、ロシア語における(多重) wh 要素の生起位置と解釈に関係した先行研究の要点をまとめ、考察をおこなう。そして 4 節では、これまでの先行研究で取り上げられていなかったパターンの適格なロシア語文の存在を指摘し、ロシア語における非前置 wh 要素の生起可能性を対比トピックとのかかわりで分析する。5 節はまとめである。

2. 情報構造と語順のかかわり

前節では“フォーカス”に関する研究が、諸分野の言語研究者によりあらためて盛んに行われつつある現況に言及したが、その理由の一部は“フォーカス”という概念が研究者により異なる種々の意味で用いられていることと関係していると言える。

本稿では、Lambrecht(1994:chap.5)などを参考に、談話中で発話が発せられる際の情報構造に注目して“フォーカス”をとらえる立場のうち、発話の前提と主張が何かに注目する構造意味論的な意味で使う。

なお、発話中にみられる音声的際立ちを指す場合にも“フォーカス”とい

う術語が用いられることがあるが、本稿ではこうした場合には“フォーカス”という術語は用いず、“プロミネンス”という術語を用いる。

情報構造のあり方が言語の上に実現される手段としては、i) イントネーション、ii) 語順、iii) 特定形態（日本語のハヤガ等）、iv) 特定構文（分裂文等）、v) 省略、といったもの（あるいはそれらの組み合わせ）が考えられ（Korbayova and Steedman 2003 等）、各言語でどのような手段（の組み合わせ）が用いられるかという点から類型を考えることができる。例えば van Valin(1999)中では、情報構造と語順とのかかわりあいに関する類型論的分類として、i) 統語法の厳格性 vs 柔軟性と、ii) フォーカス構造の厳格性 vs 柔軟性とを交差させる形で、4つの言語タイプが設けられている¹が、その分類によれば、ロシア語は“柔軟な統語法・柔軟なフォーカス構造”言語に属するとされている。

表 1 : van Valin (1999:514)によるフォーカス構造と統語法とのかかわり

	Rigid Focus Structure	Flexible Focus Structure
Rigid Syntax	French, Toba Batak	English, Toura
Flexible Syntax	Sesotho, Italian	Russian, Polish

しかしながら、van Valin(1999)での“厳格”か“柔軟”かという区分はあくまで、どのような側面を比較するかによった相対的な区分であって、絶対的なものではない。ロシア語のフォーカス構造が“柔軟”だとされるのは、例えば次の(1Q)のような先行文脈を想定し、その答えとして文全体がフォーカスになった発話がおこなわれるケースを考えた場合、表1の左列にかかげられたフランス語やイタリア語等の諸言語と比べ、語順に自由度がみられる点を重視した分類である。つまり、“文フォーカス”構造をもった発話とし

¹ 統語法の厳格性 vs 柔軟性は「語順の自由さ」を基準に定義されている。また、フォーカス構造の厳格性 vs 柔軟性は、potential focus domain（当該領域内の要素がフォーカスになり得る可能性をもつ領域）に対する制限を基準に定義されている。

languages in which the potential focus domain is the entire main clause in simple sentences will be considered to have flexible focus structure, whereas those in which the potential focus domain is restricted to a subpart of the main clause will be considered to have rigid focus structure.

(van Valin 1999: 513)

て、ロシア語では(1Aa)の NP-V、(1Ab)の V-NP、いずれの語順も可能だという“柔軟さ”があるといった点を重視した分類なのである(フランス語やイタリア語では当該文の“文フォーカス”構造の発話としては V-NP 語順しか許されないという; van Valin 1999:521-2)。

(1) Q: Chto sluchilos’?

what.NOM happened

“What happened?”

A: a. Mashina slomalas’.

car.NOM broke_down

“[My] car broke down.”

b. Slomalas’ mashina.

broke_down car.NOM

“[My] car broke down.”

(van Valin 1999:521 (23))²

一方で、van Valin(1999)自身も(2)や(3)のような例を引いて述べているように、発話の項要素がフォーカスとなった“項フォーカス”構造をもった文に注目すると、ロシア語では wh 疑問文の wh 要素は文頭に前置され、また、プラグ学派の FSP(Functional Sentence Perspective)諸研究が論じる通り(Sgall 1967 等)、平叙文では theme-rheme の語順となるのが原則という強い傾向が存在しており、ロシア語はその面ではかなり“厳格な”フォーカス構造言語としての特徴を有しているともいえるのである。

(2) Q: Kto zaschischajet Viktora?

who.NOM defends Victor.ACC

“Who defends Victor?”

A: Viktora zaschischajet Maksim.

Victor.ACC defends Maxim.NOM

“MAXIM defends Victor.”

(van Valin 1999:521 (22a))

² 先行研究から例文をそのまま引用したものについては出典を示している。(なお、この場合にキリル文字の転写法とグロースを本文のものに統一させている。) 出典を特にあげない例は作例であり、その容認度として、ロシア語については著者自身の、英語と日本語については著者が情報をえた母語話者の判断を示している。

(3) Q: Kogo zaschischajet Maksim?

who.ACC defends Maxim.NOM

“Who(m) does Maxim defend?”

A: Maksim zaschischajet Viktora.

Maxim.NOM defends Victor.ACC

“Maxim defends VICTOR.”

(van Valin 1999:521 (22b)³)

要するに、van Valin(1999)の類型分類における、統語法とフォーカス構造の“厳格さ”、“柔軟さ”の区分は絶対的なものでなく、またおおまかな分類であり、表 1 の類型はさらに詳細な検討を加える必要のあるものである。続く 3 節では、その具体的な検討の手がかりとして、(多重) wh 要素の生起位置と解釈に関するロシア語の特徴について、英語と日本語の場合とを対照し考察する。

3. (多重) wh 要素の生起位置と解釈の可能性

3.1. wh 要素の生起位置、多重 wh 疑問文と pair-list、single-pair の解釈

本節では以下の(4)のように wh 要素を複数含む疑問文、多重 wh 疑問文を中心に考察をおこなう。

(4) (おみやげとして) あなたは誰に何を買ったの？

wh 要素の生起位置については一般に、日本語では(4)のように非文頭 in situ 位置での生起が可能なのに対し、英語ではエコー文(5A'等)でない限り一つの wh 句が文頭に位置する必要がある(cf. 5Aa に対する 5Ab)一方、複数の wh 句が連続的に文頭に位置することはない(6a, b 等)という違いがある⁴。

³ van Valin(1999:521 (22))で引かれている例文の出典は Comrie(1979, 1984)であると述べられている。

⁴ 時と場所の adjunct 要素のように、ある種の wh 句が and で並列され文頭に位置することもある。

(i) When and where did Mary sing?

Cf. *When where did Mary sing?

- (5)A: I heard you went shopping at Harrods yesterday.
- a. What did you buy for Ivan? (通常の wh 疑問文)
- b. ?? You bought what for Ivan?
- B: I bought a special Ty Beanie Baby- Charles the Bear for him.
- A': Sorry, you bought what for him? (エコー疑問文)
- (6) a. * What for whom did you buy?
- b. * For whom what did John buy?
- c. What did you buy for whom? (May 1985: 130 (32b))
- d. For whom did John buy what? (May 1985: 130 (32a))

また多重 wh 疑問文の解釈としては、英語では pair-list 解釈（例えば 6d の例でいうと、おみやげを買うべき複数の相手があって、そのそれぞれの相手に何をおみやげとして買ったか、組み合わせのリストをたずねるような場合；以下適宜 PL と略記する）の可能性に対し、single-pair 解釈（誰かに何かを買ったという一つの出来事について、誰に何をだったかたずねている質問文；以下適宜 SP と略記する）はエコー文でないと難しいとされ⁵、それに対し日本語文では、PL と SP、いずれの解釈も非エコー環境で可能という違いがあるとされる⁶。

⁵ 多重 wh 疑問文に関し語順により、英語、ロシア語、日本語を含む諸言語で、PL、SP の解釈がそれぞれ可能かどうかについては、Grebenyova(2006:chap.3)による先行研究のまとめを参照。なおロシア語多重 wh 疑問文で SP 解釈が可能かどうかについては、可能とする者(Stepanov 1998 等)と不可能とする者(Grebenyova 2006)とがある。本稿では、筆者(=E.E.)が母語とするロシア語変種での判断（先行研究でもそのような判断が多い）にもとづき、可能であると記述していく。

⁶ 例えば Ono(2004: (29),(35))は、日英語における、非エコー環境での SP 解釈の可否の違いを例示するため、

(i)a. Who ate what?

b. John ate an apple, Bill ate an orange, and Mary ate a banana.

c. #John ate an apple.

(ii)a. 誰が何を買ったの？ - b. ジョンがりんごを買った。

のような例をあげている。（日本語ローマ字表記を漢字仮名交じりにあらためた。以下同）

なお、日本語多重 wh 疑問文における SP 解釈、PL 解釈の可否が、ノダ文であるかどうかといった述語部分の構文的複雑さともかかわっているという指摘が Takubo(1985)で行われており、その要点をここでまとめておく。（ただし、本文中で日本語文を挙げる際には随時ノダ文も掲げ、各種の感嘆文やイッタイ文、修辞疑問文等の可否がノダ構文といかにかかわるか自体は、本論文では議論の対象としない。）

一方、ロシア語については一般に、wh 要素を文頭に位置させる力の働きが強く、i) エコー環境でも、文頭または主語の後（両者を含め節頭と呼ぶ）に wh 句を位置させず in situ 位置に残した発話は不自然で（7Ba に対する b,c 等）、また、ii) 多重 wh 疑問文でも、in situ 位置に対する制約が強く（cf. 8e,f）、複数の wh 要素が連続して文頭部分に位置する方が普通である（Cf. 8a,b）。ただし、多重疑問文の場合は二番目の wh 要素が Top(ic)要素の後に来るともよくある。（8c では Top 要素である主語の後、8d は Top 要素である間接目的語の後に来ている。非節頭位置での wh 句の生起については本稿 4 節中でも触れるところがある。）

このように wh 句の文中での位置に関してはロシア語は日本語（や英語）と異なっている。

一方、多重 wh 疑問文の解釈について見ると、ロシア語では日本語同様、PL、SP いずれの解釈も可能である（既述のように英語単文では非エコー環境での SP 解釈は不可能である）。

- (7)A: V kachestve suvenira ja kupil Ivanu chasy.
 As_for a souvenir I.NOM bought Ivan.DAT watch.ACC.
 “As a souvenir, I bought a watch for Ivan.”
- B: a.Chto ty kupil Ivanu?
 what.ACC you.NOM bought Ivan.DAT
- b.*Ty kupil Ivanu chto?
 you.NOM bought Ivan.DAT what.ACC

まず「何を買いますか」といった非ノダ単純文が「何」を焦点とした質問文として適格に発せられるためには、変数「何」に関し問題とされている対象の集合が文脈から制限されていなければならないという要請があると考えられるという（それに対し、「何をかうのですか」というノダ文ではそのような制限は必ずしもなくてよい）。それゆえ、「一体」のような「何」に関するドメイン制限をとりはらおうとする働きを持つ表現を一緒に用いた場合、「一体何を買いますか？」では「何」のドメイン制限に関して齟齬が生じ不自然となるが、「一体何をかうのですか？」ではそのような齟齬は生じない。

また、多重 wh 疑問文についてみると、「(一体) 誰が誰をなぐったのですか」というノダ文では SP、PL いずれの解釈も可能なのに対し、非ノダ文「誰が誰をなぐりましたか」では、変数に関するドメイン制限要請が存在することから、SP 解釈だと、すでに文脈上どのような組み合わせなのかかわかっているはずのペアをたずねるといふ不自然な質問をすることになってしまい許されず、可能な解釈は PL 解釈に限られるのである。

- c. ??Ty chto kupil Ivanu? (エコー環境なら OK)
 you.NOM what.ACC bought Ivan.DAT
 “What did you buy for Ivan?”
- (8)a. Chto komu ty kupil?
 what.ACC who.DAT you.NOM bought
- b. Komu chto ty kupil?
 who.DAT what.ACC you.NOM bought
- c. Komu ty chto kupil?
 who.DAT you.NOM what.ACC bought
- d. Kto tebe chto podaril?
 who.NOM you.DAT what.ACC bought
- e. *Chto ty kupil komu?
 what.ACC you.NOM bought who.DAT
- f. *Komu ty kupil chto?
 who.DAT you.NOM bought what.ACC
 “What did you buy for whom?”

3.2. 種々の多重 wh 文

続いて、多重 wh 要素を含む文の解釈と関連性をもつ、先行研究における指摘を 3 つ、3.2.1 (多重 wh 感嘆文)、3.2.2 (the-hell 類語句を含んだ多重 wh 文)、3.2.3 (多重 wh 修辞疑問文) でそれぞれ取り上げ、その要点をみていく。なお 3.2.4 では 4 節での考察の準備として複雑 wh 句に関する Grebenyova(in press)の指摘の要点をまとめさらに補足的指摘をおこなう。

3.2.1. 多重 wh 感嘆文

第一に、多重 wh 要素の解釈の可能性に関連した興味深い指摘として、ある言語が多重 wh 感嘆文を容認するかどうかと、その言語が多重 wh 疑問文に SP 解釈を与えうるかどうかとが、共通した振る舞いをみせるという、Ono(2004)による理論的予測がある。例えば、英語のように多重 wh 要素の解釈としてエコー環境を除き SP 解釈の可能性がない言語では、(9a)のように多重 wh 感嘆文が許されないのに対し、日本語のように多重 wh 要素の解釈として SP 解釈も非エコー環境で可能である言語では、(9b)のように多重

wh 感嘆文が許されるというのである。

(9)a. *What a long paper John sent to what a famous journal!

(Ono 2004: (2b))

b. ジョンはなんて有名な雑誌になんて長い論文を送ったのだ。

(Ono 2004: (3b))

Ono(2004)はロシア語については扱っていなかったが、そのような理論的予測がロシア語についても成り立つかどうかここで検討してみたい。日本語と同じく SP 解釈の可能なロシア語では、多重 wh 感嘆文が可能と予測されるのであるが、

(10) Kakuju prekrasnuju rabotu v kakoi uzhasnyi zhurnal
what.ACC splendid.ACC paper.ACC to what.ACC lousy.ACC journal
poslal Ivan!
ACC.sent Ivan

“What a splendid paper Ivan sent to what a lousy journal!”

はたして、上の(10)のような例は適格なロシア語文であり、多重 wh 感嘆文はロシア語においても容認されることがわかる⁷。

3.2.2. the-hell 類語句を含んだ (多重) wh 文

第二に、(多重)wh 構文に関係する先行研究の指摘のうち、他の興味深いものとして、wh 要素の D(iscourse)-linkedness の有無とかかわって、同じく多重 wh 文であっても、PL/SP 解釈の可否に関し異なった振る舞いを示すというものがある(Pesetsky 1987, den Dikken and Giannakidou 2002, Huang and Ochi 2004 等)。なお D-linked wh 句とは、当該 wh 要素に関する適切な答えの範囲が、当該発話までにすでに文脈上導入、喚起されている

⁷ 注 5 で言及した、ロシア語多重 wh 疑問文の SP 解釈の可能性に関する、先行研究間での異なった記述からすると、Ono(2004)の理論的予測の妥当性を検証する上では、Grebnyova(2006)が記述するロシア語変種を用いる話者が(10)の多重 wh 感嘆文を容認するかどうかは、興味深い点である。

対象の集合により制限されているような wh 要素をさしている⁸。

英語には、wh 要素に後接し当該 wh 句に non-D-linkedness を強く要求し wh 要素とともに文頭に位置するとされる (cf. 11c, 12b) 一群の強意的表現がある⁹。Pesetsky 1987 が ‘aggressively non-D-linked wh phrase’ と呼ぶ句を形成する表現で、“the hell”、“on earth”、“the Dickens”等があり、the-hell 表現と総称される。そのような the-hell 表現は、その強い non-D-linkingness の性質から、内在的 D-linking 要素である“which”を含む wh 句では用いられず、そのような内在的性質をもたない“who”や“what”を含む句では用いられるため、(12a)と(12b)とで容認度の差がでると説明されることがある(Pesetsky 1987 等)。

- (11)a. Who the hell bought that book?
(den Dikken and Giannakidou 2002: (1b))
- b. Who the hell bought what? (Huang and Ochi 2004: (2c))
- c. * Who bought what the hell? (Huang and Ochi 2004: (2e))
- (12)a. What the hell book did you read that in?
(Pesetsky 1987: (38a))
- b. * Which the hell book did you read that in?
(Pesetsky 1987: (38b))

また、多重 wh 文で the-hell 表現を用いた単文はエコー環境での SP 解釈の

⁸ “...when a speaker asks a question like *Which book did you read?*, the range of felicitous answers is limited by a set of books both speaker and hearer have in mind” (Pesetsky 1987: 107f.)

⁹ このような the-hell 表現を伴う wh 句が、any 句のような極性表現に近い振る舞いを示す点 (例えば、(i)a に対する(i)b, c を参照) もよく注目される点である。

- (i)a. {I know/I don't know} who would buy that book.
b. {*I know/I don't know} who the hell would buy that book.
(den Dikken and Giannakidou 2002:33 (5a, b), (6a, b))
c. {*I know/I don't know} that anyone would buy that book.
(Ono 2006:114 (23))

みが可能 (cf. 13a, b) だという¹⁰。

(13)a. Who is in love with who? (PL と SP エコー解釈が可)

b. ?Who the hell is in love with who? (SP エコー解釈のみ可)

(den Dikken and Giannakidou 2002:54 (63a), (64a))

さて、英語の *the-hell* 表現と対照されることのある他言語の表現 (かりに *the-hell* 類語句と呼ぶ) としては、フランス語(*diable*)、ドイツ語(*zum Teufel*)、日本語「いったい」、中国語「到底 *daodi*」、ロシア語の *chert* {*poberi/voz'mi*}, *koroche* 等、種々のものがある¹¹。

ここで、英語の *the-hell* 表現と日本語の「いったい」(中国語「到底」) とを扱った先行研究 (Huang and Ochi 2004) を参照すると、日本語の「いったい」や中国語の「到底」は英語の *the-hell* 表現とは少なくとも以下の点で異なるという。

i) 肯否疑問文でも生起可能¹²である点

ii) *wh* 句より上の付加位置で生成される副詞で *wh* 句と離れて (*discontinuous*) 生起可能¹³である点

iii) *d-linked wh* 句と共起可能¹⁴である点

¹⁰ ただし、(i)のように複文中の従文が多重 *wh* 疑問文で *the-hell* 表現を含んでいる場合なら PL 解釈が可能である。

(i) I am {wondering/would like to know} who the hell is in love with who.

(den Dikken and Giannakidou 2002: 54 (64b))

¹¹ ロシア語に関して先行研究で *the-hell* 表現と対照された表現例として Hagstrom, P. and S.McCoy(2003)における *zhe* の例もある。

¹² (i) a. *I wonder **whether the hell** you want to buy this book or not.

b. ni **daodi** mai-bu-mai shu (ne)?

you *daodi* buy-not-buy book (Q) 'Will you buy books or not?'

c. 君は**いったい**その本を買ったの? (買わなかったの?)

(Huang and Ochi 2004:(41))

¹³ (i) ***What** did he buy **the hell**? (Huang and Ochi 2004:(5a))

cf. **What the hell** did he buy?

(ii) ta **daodi** mai-le **shenme**?

he *daodi* bought what (Huang and Ochi 2004:(9a))

(iii) a. 彼は **いったい 何を** 買ったの? b. **いったい**彼は**何を**買ったの?

(Huang and Ochi 2004:(28))

¹⁴ 英語の *wh* 要素については先行研究(Pesetsky 1987 等)で、内在的 *D-linking* 要素である *which* と、そうでない *who*, *what* 等といった区分がたてられ、また *the-hell* 要素が強い *non-D-linkingness* の性質を持っているとされることから、*which* と *the hell* が共起した(12b)のような例の非適格性が説明されていたわけである。

(i) a. ***Which the hell** book does he want to read?

ここで以上の3点に関し、ロシア語 *the-hell* 類語句として、*chert* {*poberi/voz'mi*} (lit. the devil take it) と *koroche*(*govorja*)(lit. briefly (speaking))に着目し、上述の i)、ii)、iii)の特徴について、英語 *the hell* と対照しておく¹⁵。

i)について

以下の(14b)の例に示すように、*chert* {*poberi/voz'mi*}が日本語の「いったい」や中国語の「到底」と同じように肯否疑問文でも生起できるのに対して、*koroche*(*govorja*)を肯否疑問補文中に含んだ文は非文法的になる。

(14) a. I have no idea whether (*the hell) he knows about it.

b. Ja ponjatija ne imeju, znaet li,

I.NOM idea.GEN not have knows PCL

{*chert poberi* / **koroche* (*govorja*)}, on ob etom.

the_hell briefly speaking he.NOM about it

“I don’t have the slightest idea whether he knows about it.”

ii)について

英語では *the-hell* 表現が *wh* 句とともに文頭に位置しなければならないのに対して、ロシア語では、*chert* {*poberi/voz'mi*} も *koroche*(*govorja*) も、どちらも *wh* 句と離れて生起可能である（この点は日本語、中国語と共通している）。

以下の(15)~(17)の例からも分かるように、一つの *wh* 句しか含まない文

b. ta **daodi** yao kan **na** yi ben shu?

he *daodi* want see which one CL book

c. 君は いったい どの本を読みたいの? (Huang and Ochi 2004:(40a,b,c))

なお、Huang and Ochi(2004)は上のような例をあげ、「いったい」「到底」は D-linked *wh* 句と共起可能と指摘している。その際、「どの」「哪 *na*」は *which* とは異なり内在的 D-linked *wh* でなく、non-D-linked な用法が可能であるため(ib,c)が容認されるとする立場

(Pesetsky 1987) に対しては、「太郎と次郎と博のうち、君はいったいどの人が好きなの?」(Huang and Ochi 2004: fn.10 (i))という例をあげ、この例では「どの人」は文脈的に D-linked であるが、やはり「いったい」と共起可能であると述べている。

¹⁵ *chert* {*poberi/voz'mi*}との対照を示唆した匿名査読者に感謝する。なお Huang and Ochi(2004)では英語の *the-hell* 表現とドイツ語 *the-hell* 類語句との対照に関連し、*zum Teufel* と *eigentlich* の2つの表現をあげ、前者の方が英語の *the-hell* 表現に近く、後者の方が「いったい」「到底」と近い特徴を持つと述べられている。ロシア語 {*chert poberi/voz'mi*} と *koroche* に関しても同様のことがいえよう。諸言語の *the-hell* 類語句を対照する際には、*the-hell* 表現のどのような特徴に注目して対照するかが問題となる。

においても、多重に wh 句を含む文においても chert {poberi/voz'mi}や koroche(govorja) は(a)~(d)のような位置で生起しうる。

(a) 文頭(15a,17b)

(b) 文末(15b,17c)

(c) (一つ目の) wh 要素の直後(15c,16)

(d) wh 要素の後に主語 (17a) や他の要素 (15d の間接的目的語の *tebe* のように) が現れた後

(15)a. {Chert poberi / Koroche (govorja)}, chto tebe

the_hell briefly speaking what.ACC you.DAT

ot menja nuzhno?

from me.GEN necessary

“What the hell do you need from me at all?”

b. Chto tebe ot menja nuzhno, {chert poberi / koroche (govorja)}?

c. Chto, {chert poberi / koroche (govorja)}, tebe ot menja nuzhno?

d. Chto tebe, {chert poberi / koroche (govorja)}, ot menja nuzhno?

(16) Kto, {chert poberi / koroche (govorja)}, kogo sobiralsja razygryvat'?

who.NOM the_hell briefly speaking who.ACC was_going_to cheat

“Who the hell was going to cheat who?”

(17)a. Chto ty, {chert poberi / koroche (govorja)}, komu

what.ACC you.NOM the_hell briefly speaking who.DAT

pytaesh'sja dokazat'?

try show(lit.:prove)

“What the hell are you trying to prove to whom?”

b. {Chert poberi / Koroche (govorja)}, komu chto ty pytaesh'sja dokazat'?

c. Komu chto ty pytaesh'sha dokazat', {chert poberi / koroche (govorja)}?

iii)について

ロシア語の wh 要素で英語の which のように内在的に D-linked で、

the-hell 類語句と共起できない要素があるかどうかについては、先行研究では否定的な意見が出されている (Boškovic 2002、Grebennyova 2006 を参照)。

3.2.4 節で触れる、複雑 wh 句を形成する wh 要素をあえて D-linked である (少なくとも英語の which(NP)により近い kotoryi(NP)については) と仮定して考えても、以下の例で示すように、英語に見られるような D-linked wh 句との共起制限に関する制約は観察されない。

(18) Kotoruju iz svoih mashin ty,
which.ACC.SG from self.GEN.PL car.GEN.PL you
{chert poberi / koroche (govorja)}, prodaesh?
the_hell briefly speaking sell
“Which the hell of your cars are you selling? (lit.)”

(19) Kakomu, {chert poberi / koroche (govorja)}, iz etih
what.DAT.SG. the_hell briefly speaking from this.GEN.PL
mal'chikov ty prodal knigu?
boys.GEN.PL you.NOM sold book.ACC.
“To which the hell of these boys have you sold the book? (lit.)”

このように、英語とは違って、ロシア語では D-linked wh 句との共起制限に関する制約が存在していないように思われる。

まとめておくと、ロシア語の chert {poberi/voz'mi} や koroche(govorja) は英語の the-hell 表現とは既述の (i), (ii), (iii) すべてにおいて異なる (一方、日本語の「いったい」と中国語「到底」などと共通している) ¹⁶。

また、多重 Wh-文の PL/SP 解釈の可能性についていうと、上述の通り、英語では多重 wh 文で the-hell 表現を用いた単文はエコー環境での SP 解釈のみが可能 ((13a, b) を参照) であるのに対して、ロシア語では (16) のような文においては chert {poberi/voz'mi} や koroche(govorja) を含んでいない場合と同様にどちらの解釈も可能であり、これらの表現によって影響されない。

¹⁶ 既述の通り koroche(govorja) を肯否疑問補文中に含んだ文が非文法的になる点については別とする。

以上のことをまとめると、ロシア語については、英語の **the-hell** 表現に関して指摘されている **wh** 要素の **D(iscourse)-linkedness** の有無と **the-hell** 類語句との共起の可否及び **PL/SP** 解釈の可否とのかかわりが観察されなかった。

Huang and Ochi (2004)は、英語以外の言語も含めて説明する上では、**the-hell** 類語句がもつ性質として、Pesetsky(1987)がとらえた強い **non-D-linkingness** という観点から分析するのではなく、話者のある種の主体的態度をあらわす表現という観点から分析を行っている。また **wh-the-hell** 表現については Ono(2006:114)は同じような分析を行っている。

実際にも英語の **the-hell** 表現と対照される表現のほとんどは、共通点として、<いらだち>や<非難>といったある種の話者主体的態度 **logophoric attitude** を伴って発話される¹⁷と言える。

本稿でも Huang and Ochi(2004)や Ono(2006)にならい、**the-hell** 類語句のもつある種の話者主体態度性に着目する立場を共有している。

今までの考察から言えるのは、ロシア語の **the-hell** 類語句に関しては英語について観察されるような **wh** 要素の **D(iscourse)-linkedness** の有無と **the-hell** 類語句との共起の可否及び **PL/SP** 解釈の可否とのかかわりが観察されなかったということを指摘できるだけであって、ロシア語と日本語、中国語と英語との違いは **the-hell** 表現の性質の違いに基づくものなのか、それとも **wh**-表現の性質の違いによるのかという判断は今後の課題にしたい。言い換えると、ロシア語の **the-hell** 類語句が英語のように強い **non-D-linkingness** の性質を持っていないからなのか、それとも **wh**-要素自体に **D-linkedness** の性質がないため **the-hell** 類語句と共起し得るからなのかはそれだけでは分からない。

3.2.3. 多重 **wh** 修辭疑問文

第三の、多重 **wh** 文に関する興味深い指摘として、Sprouse(2007)中のものが挙げられる。Sprouse(2007)では、多重に **wh** 要素を含む疑問文が単一修辭疑問文化する場合があることが指摘されている。

¹⁷ 以上にあげたロシア語 **the hell** 類語句の例も同様の話者主体的態度を伴うものであったという点において共通している。(ただし {chert peberi/voz'mi} に比べると koroche の方がそのような態度性の性格がはるかにうすい。)

Sprouse(2007)は修辞疑問文(Rhetorical Questions¹⁸)について、言語によって、修辞疑問文中で一つの wh 要素しか許さない言語がある一方、多重 wh 要素を単一の修辞疑問文中で許す言語もあると指摘し、英語、日本語、ロシア語をはじめ、いくつかの言語の例を取り上げ分析している。しかし、英語、日本語、ロシア語の中で、このようなタイプの修辞疑問文が容認されないのは、英語だけであるという (20a, b, c)。

(20)a. After all, who would bring what to the party?

(Sprouse 2007:(3d))

“Nobody would bring anything to the party.”

といった修辞疑問解釈不可

b. 誰が何をパーティーに持って来たというの? (Sprouse 2007:(3b))

「誰も何もパーティーに持ってこなかったらう」

といった修辞疑問解釈可

c. I kto chto prines na tvoju vecherinku?

and who.NOM what.ACC brought to your.ACC party.ACC

(Sprouse 2007:(3c)を改変)

“Nobody brought anything to your party.” といった修辞疑問解釈可

3.2.でこれまで取り上げてきた多重 wh 疑問文が関係した文解釈について、英語、日本語、ロシア語を対照した結果の一部をまとめてみると、i) 多重 wh 感嘆文が不可、ii) 非エコー文で多重 wh 疑問文に SP 解釈を与えることが不可、iii) 多重 wh 修辞疑問文が不可、なのは英語だけで、日本語とロシア語は i)~iii)それぞれが可というものであった。これら i)~iii)の文解釈に関し、英語、日本語、ロシア語の間でみられる連動が、さらに幅広い言語についてもみられるものであるかを検証する。同時に、感嘆、SP 解釈、修辞疑問をつなぐ背後の意味・統語論的機構を定式化することについてさらに探究を行っていく必要がある。

また、ロシア語については、英語の the-hell 表現に関して指摘されている wh 要素の D(iscourse)-linkedness の有無と the-hell 類語句との共起の可否

¹⁸ Rhetorical Questions have the syntactic form of a question, but have the semantic value of a declarative. (Sprouse 2007)

及び PL/SP 解釈の可否とのかかわりが確認できなかった。

英語、日本語、ロシア語における多重 wh 文の解釈可能性に関し、本稿でこれまで考察してきた主なポイントを表にかかげておく（○は可、×は不可をあらわす）。

		英語	日本語	ロシア語
wh 要素の解釈	SP	×	○	○
	PL	○	○	○
多重に wh 要素を含む感嘆文		×	○	○
修辞文における多重 wh 要素		×	○	○

3.2.4. 複雑 wh 句(complex wh-phrases)を含む wh 疑問文

多重 wh 疑問文でも、wh 句が単純なものである場合には先に見たとおり、いずれの wh 要素も前置されるのが自然な語順である(cf. (8))。

一方、wh 句が [kakoj NP]_{DP} ({which/what (kind of) } NP) や、 [chei NP]_{DP} (whose NP) のような複雑なもの(complex wh-phrases) について見ると、振る舞いが違う点がある。ここで Grebenyova(in press)による次の A) ~C) の指摘をあげておく。

A) 単一 wh 疑問文では、wh 句全体を前置した語順(21a, b)以外に、他の LBE (Left Branching Extraction) 構文¹⁹の場合(22)と同じく、kakoj や chei という wh 要素だけを前置した LBE 構文の語順も可能である(21c, d)。

¹⁹ LBE 構文が英語でも日本語でも不可能である点については、いくつかの分析の可能性を検討した上で、どちらの言語でも NP の主要部にあたる N を省略して、その修飾要素である形容詞や数量詞だけを残して N の投射を行うことが不可能であるのに対し、ロシア語ではそのような投射が可能であることと関係づけて解釈しようという分析が Peretsvaig(2007)で提案されている。そのような分析の妥当性についてはここでは議論しない。分布についてだけいうと、三つの言語の中で i) wh 要素の義務的前置がみられないのは日本語だけ、ii) スクランプリングが見られないのは英語だけ、iii) 主要部 N を省略した NP 投射がみられるのはロシア語だけという 3 特徴の分布のうち、iii) が、三言語のうちロシア語でだけ LBE 構文が可能であるという分布と一致している。

- (21)a. Kakuju mashinu on kupil ?
 what²⁰.ACC car.ACC he.NOM bought
 “What kind of car did he buy?” (Grebenyova in press:(3e))
- b. Chju mashinu on kupil ?
 whose.ACC car.ACC he.NOM bought
 “Whose car did he buy?”
- c. Kakuju on kupil mashinu ?
 what.ACC he.NOM bought car.ACC (Grebenyova in press:(3a))
- d. Chju on kupil mashinu ?
 whose.ACC he.NOM bought car.ACC (Grebenyova in press:(3b))
- (22) Doroguju on kupil mashinu.
 expensive.ACC he.NOM bought car.ACC
 “An expensive car, he bought” (Grebenyova in press:(3d))

B) なお、複雑 wh 句(complex wh-phrases)を多重に含む wh 疑問文に関する可能な語順を整理してみると、いずれの wh 句もともに前置した語順(23a)が可能であるだけでなく、一つ(以上)の wh 句は前置するが残りの wh 句は前置しない語順(23b)も可能である。

- (23)a. Kakomu mal'chiku kakuju igrushku Ivan podaril?
 what²¹.DAT boy.DAT what.ACC toyACC Ivan.NOM gave_as_present
- b. Kakomu mal'chiku Ivan podaril kakuju igrushku?
 what.DAT boyDAT Ivan.NOM gave_as_present what.ACC toyACC
 “Which boy did Ivan give which toy?”
 (Grebenyova in press:(2a, b))

C) ただし、多重 LBE 構文は不可能である。例えば、複数の複雑 wh 句 (complex wh-phrases)から kakoj や ch'ju といった wh 要素だけを前置し

²⁰ Grebenyova (in press) では(21a, c)の kakuju は what-kind-of のグロースが付けられている。

²¹ Grebenyova (in press) では(23a,b)の kakomu と kakuju はそれぞれ which.DAT と which.ACC のグロースが与えられている。

た多重 LBE 構文(24)は非文法的である。

- (24) *Kakoj ch’ju aktjer kupil mashinu ?
 what²².NOM whose.ACC actor.NOM bought car.ACC
 “Which actor bought which car?” (Grebenyova in press:(4a))

Grebenyova(in press)中の指摘の要点として、上で(A)～(C)をまとめたが、ここではそこで指摘されていなかったケースとして、単純 wh 句と複雑 wh 句(complex wh-phrase)からなる多重 wh 文の語順に関する観察(D)を補っておきたい。

(D) 多重 wh 文のパターンとして、wh 句を 2 つ含む文に限って考えたにしても、これまでに例をあげてきた、両方ともに単純 wh 句(8 等)あるいは複雑 wh 句(23,24 等)である場合以外に、一方が複雑 wh 句(complex wh-phrase)、他方が単純 wh 句の場合がありうるが、その場合の語順の可能性は次の通りである(ここでは非主語項要素 wh 句として、単純なもの複雑なものを 1 つずつ含む例をあげる)。

まず非 LBE 構文については以下の通りである。

- i) いずれの wh 句も非節頭の in situ 位置にある場合…不可(25a 等)
- ii) いずれの wh 句も節頭に位置した語順…可(25b 等)
- iii) 片方の wh 句が節頭に移動し、他方が in situ 位置に残った語順…in situ 位置に残るのが複雑 wh 句(complex wh-phrase)の場合のみ可(25c, d)

- (25)a. *Ivan podaril chto kakomu mal’chiku?
 Ivan.NOM gave_as_present what.ACC what.DAT boy.DAT
 b. Chto kakomu mal’chiku podaril Ivan?
 c. *Kakomu mal’chiku Ivan podaril chto?
 d. Chto Ivan podaril kakomu mal’chiku?
 “What did Iwan give to which student?”

²² Grebenyova (in press) では which としてグロースが与えられている。

一方、LBE 構文に関しては以下の通りである。

- i) 単純 wh 句が in situ 位置にある場合…不可(26a)
- ii) 単純 wh 句が複雑 wh 句(complex wh-phrase)から LBE された wh 要素の後に位置する場合…容認度が低い(26b)。
- iii) 単純 wh 句が複雑 wh 句(complex wh-phrase)から LBE された wh 要素の前に位置する場合…可(26c)。

- (26)a. *Ch'ju on prodal komu mashinu?
 whose.ACC he.NOM sold who.DAT car.ACC
- b. ??Ch'ju komu on prodal mashinu?
- c. Komu ch'ju on prodal mashinu?
- “To whom did he sell whose car?”

3.2.5. 多重 wh 疑問文における SP/PL 解釈と sluicing

続く 4 節での考察に移る前に、3.2.4 節までの多重 wh 疑問文に関する検討をうけ、多重 wh 疑問文における SP/PL 解釈と sluicing に関し、整理をおこなっておく。

先行研究が指摘する通り (Stepanov 1998)、英語と違いロシア語の多重 wh 要素文には PL、SP、両者の解釈の可能性がある(cf. 8a-d の例は、いずれも複雑 wh 句を含まない多重 wh 文であった)が、ここで wh 句が複雑句か単純句か、および、LBE とのかかわりから、多重 Wh 疑問文の PL/SP 解釈の可能性に関する観察をまとめると、以下の通りである。

- (i) 複雑 wh 句を 2 つ以上含む文は基本的に SP 解釈に傾く (cf. 27)。ただし複雑 wh 句(complex wh-phrase)中の名詞が複数形 (かつ動詞が不完了体)であった場合は PL 解釈が得られやすい(cf. 28)。

- (27) Kakomu mal'chiku kotoryi vopros
 what.SG.DAT boy.SG.DAT which.SG.ACC question.SG.ACC
- ty zadal?
- you.NOM asked
- “To what boy did you ask which question?”

(28) Ch'im detjam kakie podarki
 whose.PL.DAT child.PL.DAT what.PL.ACC present.PL.ACC
 on sobiraetsja darit'?

he.NOM is_going_to give

“To whose child(ren) is he going to give which/what present(s)?”

(ii) 一方、単純 wh 句を含む多重 wh 文では文脈が整えば、SP 解釈だけでなく PL 解釈も簡単に得られる。(cf. 29, 30)

(29) Chto Ivan podaril kakomu mal'chiku?
 what.ACC Ivan.NOM gave_as_present what.SG.DAT boy.SG.DAT

“What did Iwan give to which boy?”

(30) Komu ch'ju mashinu on prodal?
 who.DAT whose.SG.ACC car.SG.ACC he.NOM sold

“To whom did he sell whose car?”

(iii) (31b)(32b)の例のように、LBE 構文の場合、文解釈は、エコー環境での SP 解釈に傾く。

(31)a. Kto prodal ch'ju machinu?
 who.NOM sold whose.SG.ACC car.SG.ACC

SP/PL(単純 wh 句を含む非 LBE 語順)

“Who sold whose car?”

b. Kto ch'ju prodal machinu?

SP 解釈に傾く (LBE 語順) ²³

²³ 前節の(26b)(?Ch'ju komu on prodal mashinu?)で示したとおり、単純 wh 句が複雑 wh 句(complex wh-phrase)から LBE された wh 要素の後に位置するような語順はそもそも容認度が低い。したがって、以下のような文は SP/PL いずれの解釈でも不自然な語順の例である。

(i) ??Ch'ju kto prodal mashinu?

- (32)a. Ch'im detjam kakie podarki
 whose.PL.DAT child.PL.DAT what.PL.ACC present.PL.ACC
 on sobiraetsja darit'? (=28)
 he is_going_to give SP(グループ読み)/PL 可
 "To whose child(ren) is he going to give which present(s)?"
- b. Ch'im detjam kakie on sobiraetsja darit' podarki?
 SP(グループ読み)に傾く

(iv)続いて、多重 wh 疑問文に関し、wh 要素のみを残した sluicing が可能かどうかと、可能な場合、SP/PL どちらの解釈でかを検討すると、次のようなことが言える。

(33)の例からも分かるように、wh 要素だけを残した sluicing 自体は可能であるが一定の制限が見られる。補文において、多重 wh 疑問文の wh 要素だけを残し sluicing を行った場合、sluicing を行わない文で可能であったのと同じ解釈が、sluicing を行った文でも可能である(cf. 33)。しかしながら、主文で sluicing を行い、多重 wh 表現だけを残せるのは PL 解釈の時だけで SP 解釈の時は困難であるという制限がある (cf. 34, 35)。

- (33) Oni u menja sprashivajut, komu chto on podaril,
 they.NOM from me.GEN ask who.DAT what.ACC he.NOM gave
 SP/PL 可
 no ja ne pomnju komu chto (on podaril).
 but I.NOM not remember who.DAT what.ACC he.NOM gave
 SP/PL 可
 "They asked me to whom he gave what, but I don't know to whom what. (lit.)"

- (34)A. Govorjat, on kazhdomu chto-to podaril v tot den'.
 they_say he.NOM everybody.DAT something.ACC gave on that.ACC day.ACC
 SP 不可;PL 可²⁴
 "It is said that he gave something to everybody on that day."

²⁴ この語順だと全称限量表現 (kazhdyi) のスコープが存在限量表現 (chto-to) のスコープより広い解釈しか許されず、PL 解釈のみが可となっている。

B. A komu chto?

then who.DAT what.ACC

SP 不可; PL 可

(35)A. Govorjat, on komu-to chto-to podaril v tot den”.

they_say he.NOM somebody.DAT something.ACC gave on that.ACC day.ACC

SP 可; PL 不可

“It is said that he gave something to somebody on that day.”

B. ??A komu chto?

then who.DAT what.ACC

SP/PL いずれの解釈もできず不自然な答え

(SP 解釈の先行文脈があるが PL 解釈しか許されない sluicing による答えのため)

4. 対比トピックをもつ構文での wh 要素の非節頭 in situ 位置生起の可能性

最後に、ロシア語に関して、wh 要素の非前置が可能となるケースの存在について指摘するとともに、対比トピックとのかかわりでそのようなケースが可能となる条件について考察する。

まず対比トピック (Contrastive-topic) とは、新情報としてのフォーカス要素でなく談話の流れの中ですでに喚起されている旧情報要素が対比的に取り上げられたものであり、ふさわしいイントネーションによりマークされる²⁵。

またロシア語では、こうした対比トピックの存在を可能とする適切な文脈 (対比セットが喚起される文脈) が整えられた場合 (36B の応答について検討する)、対比トピックは文頭位置(36Ba)を占める必要があり、非文頭位

²⁵ 対比トピックのイントネーションによるマーキングについては先行研究で、英語、日本語、ロシア語いずれでも、対比トピック要素は一定のフレーズレベルでのトーンの指定と結びつき実現される傾向があるという指摘がある。

英語では対比トピックに当たる要素は、Bolinger(1965)で B-accent、Kadmon(2001)等の ToBI モデルで(L+)H* L H%のようにと表示される、下降に続く上昇の境界トーンにより実現されると考えられている。

また日本語に関しては、主題のハに比べ対比のハがプロミネントに(H%)実現される傾向があることが報告されている (谷口未希・丸山岳彦 2001)。

また、本稿で取り上げたロシア語の例で見られる対比トピック要素はいずれの場合も、Bryzgunova(1980)における上昇調の IK(Intonation Contour)-4 が結びつくことによりマーキングが行われる。

置を占めた(36Bb)や(36Bc)のような語順は容認度の低いものである(36,37,38 中では文脈的に対比トピックにあたる要素をスモールキャピタルで、フォーカスにあたる要素を下線で表示している)。

(36)A:(AはBがサーシャと食事をしたのは昨日かどうかを訊ねている)

Ty vchera obedal s Sashei?
 you.NOM yesterday dined with Sasha.INST
 “Did you dine with Sasha yesterday?”

B: a. S SASHEI ja obedal na proshloi nedele.
 with Sasha.INST I.NOM dined on last.PREP week.PREP

VCHERA ja obedal s Ivanom.
 yesterday I.NOM dined with Iwan.INST

“With Sasha I dined last week. Yesterday I dined with Ivan.”

b. S SASHEI ja obedal na proshloi nedele. ??Ja obedal VCHERA
s Ivanom.

c. S SASHEI ja obedal na proshloi nedele. ??Ja VCHERA obedal
 s Ivanom.

一方、これまでみてきた先行研究では、ロシア語における wh 要素の文中での位置について、少なくとも一つの wh 要素が前置される必要があるという点では意見が一致していた²⁶。

こうした文頭への前置を要求する二つの要素（対比トピックと Wh-要素）が共起した場合については以下のような振る舞いが観察される。

まず、以下の(37A),(38A)に見られる先行発話 (“IVAN bought her a pen as a present.” 「イワンは彼女にプレゼントとしてペンを買った」といった意)

²⁶ wh 要素を含む表現でも -to や -nibud' といった enclitic 要素を付加し、英語の some~ や、日本語の wh+カに似た働きの語を形成した場合など、当該 wh 要素が意味的に疑問オペレータと連合され wh 疑問文をつくっているのではないケースでは、必ずしも wh 要素が文頭に前置されない語順も可能である (i, ii の例を参照; “Did you buy anything?”, “Did you buy something?”)。ただしこれらは本節で問題にしているケースとは異なっている。

i) Ty chto-nibud' kupil? / Ty kupil chto-nibud'?
 you.NOM what.ACC-NIBUD' bought you.NOM bought what.ACC-NIBUD'
 ii) Ty chto-to kupil? / Ty kupil chto-to?
 you.NOM what.ACC-TO bought you.NOM bought what.ACC-TO

を受け、今度は聞き手を対比トピックにして、“What did YOU buy?”「あなたは何かを買ったの？」といった内容の質問を行うような場合、ロシア語で、(37B)の“A TY?”のように、“A”という対比/逆説の discourse connective の後で対比トピック要素(“TY”)だけを残し質問することが可能（英語の“And you?”や日本語の「(で) あなたは？」等に近い）である（この場合“A”を落とすのは難しい）。

しかし、もう少し長く、対比トピックとなっている S(主語)以外に、V(動詞)と DO(直接目的語)を含む発話をおこなった場合、(38Ba~d)のような語順が可能であり、特に(38Ba)では、先に 3.1 節の(7)で説明したように、エコ環境でもロシア語では容易に許されない、wh 要素の DO が V より後ろの in situ 位置で生起しうる点、先行研究ではあまり触れられないことがないが、おおいに注目すべき点である。

(37)A: IVAN kupil ei v podarok ruchku.
 Ivan.NOM bought her.DAT for gift.ACC pen.ACC
 “Ivan bought her a pen as a gift.”

B: A TY?
 and you.NOM
 “And you?”

(38) A: IVAN kupil ei v podarok ruchku. (= (40)A)
 Ivan.NOM bought her.DAT for gift.ACC pen.ACC
 “Ivan bought her a pen as a gift.”

B:a. (A) TY kupil chto?
 and you.NOM bought what.ACC
 “And you bought what? (lit.)”
 b. (A) TY chto kupil?
 c. (A) chto TY kupil?
 d. (A) chto kupil TY?
 e. (A) *kupil chto TY?
 f. (A) *kupil TY chto?

このような語順が可能となっているのには、i)対比トピック要素を文頭に

前置しようという力の働きが、wh フォーカス要素を前置しようという力に劣らず大きいこと、そして、ii)対比トピック要素と wh フォーカス要素の両方を含む文では、いずれかさえ文頭位置を占めるなら(いずれもが文頭を占めない(38Be,f)のような語順は容認されない)、残りの要素については、節頭位置で生起する必要がないと考えられること、といった諸要因が関係した結果かと思われる。

これらの要因から、同じ文脈で、wh フォーカス DO 要素が、対比トピック (ここでは S) と V に後接する in situ 位置(38Ba)以外に、対比トピック (ここでは S)より後で V の前(38Bb; S-DO-V)、対比トピック (ここでは S)よりも前 (38Bc,と 38Bd; それぞれ DO-S-V, DO-V-S の順²⁷)、いずれの位置でも生起しようという生起位置の自由度も生まれるのである。

つまり上では、wh 疑問文における wh 要素の生起位置に関し考察を行った結果、(38Ba)にみられるように、先行研究で生起可能とされていなかった、単独 wh 疑問文の wh 要素が V より後の in situ 位置で生起する可能性があることに注目し、そのような可能性は、対比トピックと wh フォーカス要素の両者を含む文に関し、少なくともその一方が文頭位置を占めればよい (残りの要素に関する節頭生起要請は強く働かない)といった認可条件があると論じたわけである。

5. まとめ

今後も引き続き、wh 要素の文中での出現条件を中心に、各言語におけるフォーカス構造の実現のあり方についてより詳しく分析を行い、本稿でまとめてきた wh 要素の出現条件の間に何らかの連動性が見られるかどうか、その原因がどこにあるか検討を深めていきたい。

²⁷ S-V 語順と V-S 語順に関しどちらが base 語順でどのような統語操作によりその逆転の可能性のあるかの詳細については本稿では立ち入らず(King:1995 section 5.4 等参照)、対比トピックや wh フォーカス要素に課せられる節頭生起要請が特に働かない場合、なんらかの仕組みにより S と V の間では、S-V、V-S、どちらの語順も可能になるものとひとまずここでは考えておく。

参照文献

- Bolinger, Dwight L. 1965. *Forms of English: Accent, Morpheme, Order*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Boškovic, Z. 2002. "On Multiple Wh-Fronting". In *Linguistic Inquiry* 33, 351-383.
- Bryzgunova, E. A. 1980. "Intonacija". In N. Švedova et al. eds. *Russkaja Grammatika Tom I*, 96-122. Moscow: Akademija Nauk SSSR.
- Comrie, B. 1979. "Russian." In T. Shopen (ed.) *Languages and their status*, 91-150. Cambridge, Mass.: Winthrop.
- Comrie, B. 1984. "Russian." In W.S. Chisolm, Jr. eds. *Interrogativity*, 7-46. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- den Dikken, M. and A. Giannakidou. 2002. "From Hell to Polarity: 'Aggressively Non-D-Linked' Wh-Phrases as Polarity Items." In *Linguistic Inquiry* 33, 31-61.
- Grebenyova, L. 2006. *Multiple Interrogatives: Syntax, Semantics and Learnability*. Ph.D. dissertation. University of Maryland, College Park.
- Grebenyova, L. in press. "Multiple Left-branch Extraction under Sluicing." In *Proceedings of the 41st CLS*.
- Hagstrom, P. and S. McCoy. 2003. "Presuppositions, wh-questions, and discourse particles: Russian *že*." In *FASL 11*. Ann Arbor: Michigan Slavic
- Huang, C.-T. J. and M. Ochi. 2004. "Syntax of the Hell: Two Types of Dependencies." In *NELS 34: Part I*.
- Kadmon, N. 2001. *Formal Pragmatics: Semantics, Presupposition and Focus*. Malden, Mass.: Blackwell.
- King, T.H. 1995 *Configuring Topic and Focus in Russian*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Korabayova, I. K. and M. Steedman. 2003. "Discourse and information structure." In *Journal of Logic, Language and Information: Special Issue on Discourse and Information Structure* 12-3, 249-259.
- Lambrecht, Knud 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic,*

Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents.
Cambridge: Cambridge University Press.

May, R. 1985. *Logical Form*. Cambridge, MA: MIT Press.

Ono, H. 2004. "On Multiple Exclamatives." Presented at Georgetown University Roundtable 2004 in March. (handout available at <http://www.ling.umd.edu/hajime/papers/Ono2004GURT.pdf> Aug, 2007).

Ono, H. 2006. An Investigation of Exclamatives in English and Japanese: Syntax and Sentence Processing. Ph.D. dissertation. University of Maryland, College Park.

Peretsvaig, 2007. "Split Phrases in Colloquial Russian: A Corpus Study." In *Formal Approaches to Slavic Linguistics 15: The Tronto Meeting*. 262-280. Michigan: Michigan Slavic Publications.

Pesetsky, D. 1987. "Wh-in situ: Movement and Unselective Binding." In E. Reuland and A. ter Meulen eds. *The Representation of (In)definiteness*, 211-246. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Sgall, P. 1967. "Functional Sentence Perspective in a Generative Description." In *Prague Studies in Mathematical Linguistics 2*, 203-225.

Sprouse, J. 2007. "Rhetorical Questions and WH-Movement." In *Linguistic Inquiry 38:3*, 572-580.

Stepanov, A. 1998. "On Wh-Fronting in Russian." In *NELS 28*, 453-467.

Takubo, Y. 1985. "On the Scope of Negation and Question in Japanese." In *Papers in Japanese Linguistics 10*, 87-115.

谷口未希・丸山岳彦 2001. 「焦点構造と助詞の卓立」 KLS 21, 56-66. 関西言語学会

van Valin, R. D. Jr. 1999. "A Typology of the Interaction of Focus Structure and Syntax". In E. Raxilina and J. Testelec eds. *Typology and the Theory of Language: From Descriptions to Explanations*, 511-524. Moscow: Jazyki Russkoi Kultury Publishers.

**On the distribution and interpretation of Wh-elements in Russian
— as contrasted with English and Japanese —**

Evseeva Elena

Abstract

In this paper, the way link/tail and focus elements appear in sentences of Russian is analyzed in order to look into the possibilities of their interpretation. The facts of Russian are contrasted with the existing analyses dealing with the focus structure of English and Japanese. The main findings are as follows:

- i) multiple exclamatives are permissible in Russian as they are in Japanese;
- ii) the (quasi-)obligatory Wh-fronting requirement in Russian can be relaxed in certain environments where a contrastive topic element occupies a sentence-initial position.